

超高齢者が「尊厳ある生」に至るプロセスへの検討

○村田弘子¹・押江隆²

(¹放送大学教養学部・²山口大学教育学部)

問題と目的

本研究では、「超高齢者の『尊厳ある生』」を提案し、自立しているであろう超高齢者のインタビューを基に複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下“TEM”と表記) を用いて超高齢者が『尊厳ある生』に至るプロセスを明らかにすることを目的とする。

『尊厳』という言葉は、国の最高法規である憲法の中で『人間の尊厳』とうたわれる、最重要の概念である。まずは、人間であるということそのものが、『尊厳』に値する。決して『物』として扱われることのないことである。そして、「自分が『自分である』こと」がその人の『尊厳』であると言えるであろう。

本研究では『尊厳ある生』を「幸福も不幸もあつたであろう人生を、他者の意思や欲望によって振り回されたりせず、自分の欲望によつても振り回されず、自分を見失うことなく、自分が『自分である』ことを保つこと」と定義する。

方法

自分の意思を持って生活をしているように見受けられる超高齢者の女性 A さんと B さんの 2 名は、身体的な老化を感じつつも認知機能も顕著な低下がなくつつがなく自立した生活をしている。

この 2 名に面接を 3 回ずつ行った。1 回目は、半構造化面接を行い、協力者に許可を得て IC レコーダに録音し、逐語記録を作成した。2 回目の面接では、1 回目の面接で得られたデータから簡単な TEM 図を作成し、図を見てもらいながら感想を述べてもらう非構造化面接を行った。3 回目の面接では、2 回目の面接データをもとに修正を加えた TEM 図を直接見てもらい、コメントをもらって更に修正を加えた。2 名から得られた語りをそれぞれカテゴリー化したうえで TEM 図を描いた。それぞれの TEM 図に共通した区分が見られたので、活動を 4 つに区分しそれぞれ「Ⅰ期 実家を離れるまで」「Ⅱ期 活動期」「Ⅲ期 自立」「Ⅳ 老後」とした。また、影響を及ぼしたさまざまな要因を社会的ガイド (Social Guidance:SG) および社会的方向付け (Social Direction:SD) としてあらわした。TEM の概念に基づき分岐点 (Bifurcation Point:BFP), 等至点

(Equifinality Point:EFP), 両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point:P-EFP) を設定した。

結果

EFP を『尊厳ある生』, P-EFP を『無気力な生』とした。Ⅰ期において身近な人からの支援 (SG) が得られ『達成感』を感じたことがある。Ⅱ期において不快 (不幸) な出来事に遭遇した時に、喪失感を味わいながらも「このままではいけない」という気概のようなものを持ち、『仕事』や『趣味』に没頭することができた。日々の生活の中に小さな楽しみを作つて苦をやり過ぎた。Ⅲ期において主人の死 (BFP) をきっかけに自分の意思で自分の行動を決められるようになっていった。また、身近な人からの趣味の勧め (SG) があり、それに没頭して発表会等 (SG) に参加をした。Ⅳ期においても老化の実感 (BFP) があるも自由で主体的な生活をし、日々の暮らしの中で小さな目標を作り、小さな達成感を味わっている。

考察

調査協力者の 2 人は、生育環境、性格、物の捉え方が全く異なるが、分析を通して、共通した事柄が多いことが示された。この 2 人は、いわゆる『独居老人』と言われている人々であるが、毎日のように顔を合わせたり電話で話をしたりする子どもや隣人・知人に支えられている。『子どもに迷惑をかけたくない』という思いは今もあるが、行く先 (自立できなくなった時) には『お世話になれる人 (子) がいる』(二人とも優しい子に育てたという自負があつた) という安心感が、心の安定に繋がっているのも事実である。

死後の世界までは言及しないという。「死後の世界があればそれ、なければそれ、ただ今を生きる」「生きていればこそ」という。

超高齢者の『尊厳ある生』に至るプロセスにおいて、『他者との関わりのなかで、自由で主体的な態度をし、日々の暮らしの中で小さな目標を作り、小さな達成感を味わう』ことが重要な鍵であると考えられる。